

徳欽県雲嶺郷のカムチベット語における消滅の危機に瀕している
かもしれない歯茎破擦音について
——方言差と年代差と個人差のあいだで——

鈴木 博之 丹珍曲措 (rTa-mgrin Chos-mtsho)*

キーワード：カムチベット語、雲嶺山脈西部下位方言群、歯茎破擦音、音変化

[要旨] 本稿では、中国雲南省徳欽県雲嶺郷で話されるカムチベット語諸方言 (sDerong-nJol 方言群 雲嶺山脈西部下位方言群) において観察される歯茎破擦音と歯茎摩擦音のゆれについて、佳碧、八里達、査里頂、査里通、永支の5か村で話される変種に認められる音声現象を簡潔に記述し、そこに認められる記述言語学、歴史言語学上の問題を議論する。

1 はじめに

1.1 雲嶺郷のカムチベット語方言

中国雲南省迪慶藏族自治州徳欽県西部を中心に話されるカムチベット語 sDerong-nJol (得榮 徳欽) 方言群雲嶺山脈西部下位方言群に属する各種方言¹は、音声方面において多様な異なりをもつ方言群である。このうち、本稿で記述する雲嶺 [Lung-gling] 郷の諸方言の下位区分は現段階では不明瞭であるものの、雨崩 [gLegs-bam] 村の方言、永支 [gLang-'gril] 村の方言、および紅坡 [dNgul-phung] 村の方言はそれぞれ独立した下位グループをなす可能性があるという点が判明している。雲嶺郷にある行政村は北から順に斯農 [gSal-nang]、西当 [Shar-steng]、果念 [sGo-mnyam]、九農頂 [lCang-nang-steng]、紅坡、査里通 [Tsha-re-thang] とあるが、本稿では果念行政村の佳碧 [lCags-spel] 自然村および八里達 [Pa-ri-steng] 自然村、査里通行政村の査里頂 [Tsha-re-steng] 自然村、査里通自然村、永支自然村で話される方言を扱う。

本稿で用いる各種方言の言語資料は、著者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者はナンセー・ドマ [gNam-gsal sGrol-ma] さん (女性; 佳碧出身) および第2著者、テンドウ・ドマ [Don-grub sGrol-ma] さん (女性; 八里達出身)、ペマ・ツモ [Pad-ma mTsho-mo] さん (女性; 査里頂出身)、ケゾン・ラモ [sKal-bzang Lha-mo] さん (女性; 査里通出身)、タシ・ドマ [bKra-shis sGrol-ma] さん (女性; 永支出身)、ガテ・ドマ [bGegs-mthar sGrol-ma] さん (女性; 永支出身) で、調査は主に香格里拉県城で行った。lCagspel 方言の調査は佳碧村でも行った。

* () 内は著者名のチベット文語つづりの Wylie 転写である。第2著者はカムチベット語 lCagspel (佳碧) 方言の母語話者である。

¹ 方言区分については鈴木 (2009)、Suzuki (2009:17) を参照。最新の見解は Suzuki (2011) を参照。雲嶺山脈西部下位方言群に属する方言は、現段階では徳欽県升平 ['Jol] 鎮、雲嶺 [Lung-gling] 郷、佛山郷、燕門郷および維西傈僳族自治州巴迪 ['Ba'-sdod] 郷に分布する。

1.2 本稿で扱う現象

雲嶺郷のカムチベット語の中には、特定の語の初頭子音について、歯茎破擦音と歯茎摩擦音のゆれが観察される方言が存在し、特に佳碧村の lCagspel 方言と永支村の gYanggril 方言においてそのゆれが顕著に認められる。本稿では、この種の現象を言語学的にどのように位置づけることができるか、方言差異、年代差異、個人差異の角度から記述と分析を行う。

なお、音声表記には正書法的な表記を用いず常に音標文字を用い、IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も断りなく用いる。

2 歯茎破擦音と歯茎摩擦音は弁別的であるか

佳碧村出身のチベット語母語話者の中には、歯茎破擦音と歯茎摩擦音はもしかすると弁別できないのではないかと実際に考える人がいる。また、lCagspel 方言は本稿で触れる方言の中でもっとも多くの資料と個人変種が収集されている。このため、まず lCagspel 方言の記述を行い、それを踏まえて他の雲嶺郷の方言の事例を加えて考察する。考察に際しては、チベット文語形式（蔵文）がチベット語の古期の発音を表しているものと想定して用いる。

2.1 lCagspel 方言の歯茎破擦音をめぐる記述

lCagspel 方言では、蔵文で歯茎破擦音を含むいくつかの語が歯茎摩擦音として実現される。また、歯茎破擦音で実現される例も少なくない。たとえば、次のようなものがある。

歯茎摩擦音の例			歯茎破擦音の例		
蔵文	lCagspel 方言	語義	蔵文	lCagspel 方言	語義
<i>rtswa</i>	^h sə wa	草	<i>rtsa ba</i>	^h tsa wa	根本
<i>gtsang ma</i>	^h sõ ma	清潔な	<i>tshong khang</i>	^h tsõ xõ	商店
<i>rtsi</i>	^h sə	数える	<i>tsha ba</i>	^h ts ^h a:	熱い
<i>ba rdzi</i>	^h pa ^h zə	牛飼	<i>mtsho</i>	^h ts ^h ɤ	海
<i>tshwa</i>	^h ts ^h a:	塩	<i>bstan 'dzin</i>	^h tẽ ^h dzĩ	[人名]

さらに複雑な例として、蔵文 dz に前接字 m, ' を伴う場合、前鼻音つき歯茎閉鎖音 ~ 歯茎鼻音で実現されるものが認められる。

蔵文	lCagspel 方言	語義
<i>mdzub</i>	^h ndə rɔʔ	指
<i>mdzes</i>	^h ndi:	美しい
<i>'dzam gling</i>	^h nã ^h lĩ	世界

逆に、蔵文で歯茎摩擦音を含む語が歯茎破擦音として実現される例も、数は少ないものの、認められる。

蔵文	lCagspel 方言	語義
<i>sa</i>	^h ts ^h a	土

「土」のような語については、歯茎摩擦音と歯茎破擦音は交替可能である。

以上に掲げた例を総合してみるならば、lCagspel 方言において蔵文に示される歯茎破擦音が歯茎摩擦音として実現される例が複数認められることから、歯茎破擦音から歯茎摩擦音への音変化が生じていると解釈できるけれども、それは完全に歯茎破擦音が歯茎摩擦音に合流したということの意味するのではなく、少なくとも対立する例が認められる。しかしそれでも、母語話者の中にはこれら両者の区別があいまいになることも多い。

また、lCagspel 方言話者の中でも個人差があり、歯茎摩擦音と歯茎破擦音のどちらを用いるかがそれぞれの話者によって異なる例がある。たとえば、「塩」を [ʼts^ha:] と発音するといった具合である。この現象もまた、lCagspel 方言においてこれら両者の発音の不安定さを示している。この現象は、学校教育で漢語を学んだことのない lCagspel 方言母語話者の話す漢語の中にも認められる。土地の漢語（西南官話雲南方言の変種）には、/ts^h, ts/の音素が認められるが、このうち/ts/がしばしば [s] と発音されるという現象が見られる。

以上の現象を総括してみると、lCagspel 方言における歯茎摩擦音と歯茎破擦音の対立それ自体が疑問視される。しかし現段階では、たとえば「草」「清潔な」といった語は摩擦音でしか実現されないし、「熱い」「海」といった語は破擦音でしか実現されないものであるから、これら両者は音素として対立すると認めることが妥当であろう。

2.2 方言間の対照

先に lCagspel 方言の事例を記述したが、雲嶺郷の複数の方言で lCagspel 方言と酷似する現象を見せるものがある。ここでは関連する語について、方言形式を対照する。

	lCagspel	Pareteng	Tshareteng	Tsharethong	gYanggril	
蔵文	佳碧	八里達	查里頂	查里通	永支	語義
<i>rtswa</i>	^{-h} sə wa	^{-h} tsə wa	^{-h} tsə wa	^{-h} tsə wa	^{-h} sə wa	草
<i>gtsang ma</i>	^{-h} sõ ma	^{-h} tsə wã	^{-h} tsõ wã	^{-h} tsõ ma	^{-h} sõ ma	清潔な
<i>rtsi</i>	^{-h} sə	^{-h} tsə	^{-h} tsə	^{-h} sə / ^{-h} tsə	^{-h} sə	数える
<i>ba(/nor) rdzi</i>	ʼpa ^{fi} zə	ʼpa ^{fi} dzə	ʼnõ ^{fi} zə	ʼnõ ^{fi} zə	—	牛飼
<i>tshwa</i>	ʼs ^h a:	ʼts ^h a:	ʼts ^h a	ʼts ^h a	ʼs ^h a	塩
<i>rtsa ba</i>	^{-h} tsa wa	^{-h} tsa wa	—	—	—	根本
<i>tshong khang</i>	ʼts ^h õ xõ	ʼts ^h õ k ^h õ	ʼts ^h õ k ^h õ	ʼts ^h õ k ^h õ	ʼts ^h õ k ^h õ	商店
<i>tsha ba</i>	ʼts ^h a:	ʼts ^h a:	ʼts ^h a:	ʼts ^h a:	ʼs ^h a:	熱い
<i>mtsho</i>	⁻ⁿ ts ^h ɣ	⁻ⁿ ts ^h u	⁻ⁿ ts ^h ɣ	⁻ⁿ ts ^h u	—	海
<i>mdzub</i>	ʼndə rɔʔ	⁻ⁿ dzə rɔʔ	ʼndə rɔʔ	⁻ⁿ də roʔ	ʼnə ⁿ dəʔ	指
<i>mdzes</i>	⁻ⁿ di:	⁻ⁿ dze:	ʼni: lə	⁻ⁿ dzi: lə	⁻ⁿ li: lə	美しい
<i>ʼdzam gling</i>	ʼnã ^{fi} lĩ	⁻ⁿ dzã ^{fi} lĩ	ʼnã ^{fi} lĩ	ʼnã ^{fi} lĩ	ʼnõ lĩ	世界

以上に示した例について考えるならば、蔵文との対応という点から考えると、Pareteng 方言の形式がもっとも忠実な対応関係をみせているといえる。ただし、Pareteng 方言の形式は、その他の方言資料が若年層の発音であるのに対し、老年層の発音であるということである。単に地域差という観点からだけでなく、年代差という観点からも差異を考える必要がある。現段階

の調査では年代差を考慮できる十分な資料を収集できていないが、直近の2～3世代の間で音変化の起きている事例が近隣の方言で認められる（鈴木 2011）ため、今後注意が必要である。

しかしながら、lCagspel 方言では若年層と壮年層の発音はいずれも 2.1 で示したような発音とゆれが認められる。gYanggril 方言においてもまた同様に発音にゆれがみられる²。それに対して Tsharethong 方言および Tsharethong 方言では、当該の発音にあまりゆれが認められない点で、若年層の発話としてはもっとも安定しているといえ、それを方言特徴として認めることができる。しかし、上例「牛飼い」など蔵文の歯茎破擦音が歯茎摩擦音で実現される例も含まれているのも事実である。

3 歯茎破擦音と歯茎摩擦音の交替を歴史言語学的にどう位置づけるか

蔵文を古期のチベット語の発音を表しているものと理解し、また雲嶺郷以外で用いられる諸方言の事例を考える限り、チベット語には明確な歯茎破擦音と歯茎摩擦音の対立が認められる。そのため、上で記述した雲嶺郷のカムチベット語に見られる事例は同地の方言群にのみ認められる特殊な改新である、と判断することは妥当であるだろう。それでは、この音変化をいかに整理することができるのか、ということが問題になってくる。

以上の原則は蔵文で歯茎破擦音をもっていなくても適用される例外的な語があり、「犬」が当てはまる。「犬」は蔵文 *khyi* であるが、雲南の諸方言では /^hts^hə/ というように歯茎破擦音で発音される。その中で gYanggril 方言では /^hs^hə/ となっている。

さて、lCagspel 方言における発音のゆれについて、本稿で言及した語彙の中で考えると、まったくゆれの見られないタイプの語があり、それは蔵文 *ts* に先行する文字がある場合で、歯茎摩擦音で実現されるものである。そのような語彙を再掲すると、以下のようなものがある。

^hsə wa 「草」 *rtswa*

^hsə 「数える」 *rtsi*

^hsō ma 「清潔な」 *gtsang ma*

つまり、この音変化は古蔵文の *sts* が蔵文 *s* になったのと同様のものと考えられる³。ただし、方言形式においては、先行子音の存在した残滓として、前気音が認められる。この音形式は lCagspel 方言では複数の年齢層の話者において安定して認められるため、すでに完了した音変化としてとらえることができるだろう。

次に、蔵文 *dz* に先行する文字がある例について、*m*, ^h 以外の子音字がある場合には、上掲のように歯茎摩擦音で実現され、蔵文 *ts* の事例と並行する。ところが、*m*, ^h が先行する場合は前鼻音が生じ、前鼻音は摩擦音に先行しないため、歯茎閉鎖音として実現されるか、場合によっては単独の鼻音になる例も認められる。また、話者によっては「美しい」（蔵文 *mdzes*）を /^hli:/ と発音する例も見受けられるが、いずれの事例も /^hdz/ > *^hz/ > /^hd/ > /nd/ - /^hl/ > /n/ ⁴ といった

² ただし上掲の形式を用いる話者は歯茎破擦音をほとんど用いない。

³ この事例は蔵文の成立過程において9世紀初の「第2次釐定」で行われた（西田 1987:122）。

⁴ 雲嶺郷の全てのチベット語方言、および同地域で用いられる漢語方言のいずれも [l] と [n] は混同されず、それぞれ独立の音素として認定される。ただし前鼻音つき [l] の [l̥] は [l] と [n] の間のゆれが認められるということになる。

音変化を想定して理解することができると考えられる。

しかしながら、Pareteng 方言や Tsharethong 方言のように、歯茎破擦音の比較的安定した方言が認められることを考えると、以上に示した音変化は最近になって生じたものと理解される。この点から想定できる歯茎摩擦音と歯茎破擦音のゆれを引き起こした原因の仮説としては、蔵文 ts に先行する文字が存在するという特定の条件下において歯茎破擦音が歯茎摩擦音に変化した方言を話す話者が、この変化を経験していない方言を話す世代もしくは方言話者との共存によって、全ての相関する例において歯茎摩擦音と歯茎破擦音の区別が不必要なものと理解されるという一種の類推がはたらいっているのではないか、ということである。

4 まとめ

本稿では、雲嶺郷のカムチベット語、特に lCagspel 方言について歯茎摩擦音と歯茎破擦音のゆれという現象を詳しく記述した。このような揺れが見られるのは、歴史的に完了した音変化である「歯茎破擦音の特定の条件における歯茎摩擦音化」という現象に端を発した、音変化上の類推がはたらいっているのではないかという仮説を提示した。

現段階では lCagspel 方言において歯茎摩擦音と歯茎破擦音は、ゆれを含まない最小対は認められないけれども、音声学的にはどちらか一方の実現しか許容しない語があることから、なお弁別的であるという判断が妥当である。しかし今後 lCagspel 方言の歯茎破擦音の行方を注視していくと、チベット語方言の中で主流ではない「歯茎破擦音の摩擦音化」という音変化の過程を観察することが可能であるかもしれない。また、現在複数の地点の方言資料を収集済みとはいえ、さらに細かい地点での方言資料や年代差異の資料を収集することで、また新たな発見も可能性も十分あるといえる。

参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23
—— (2009) 川西地区“九香線”上の藏語方言：分布と分類 《漢藏語學報》第 3 期 17–29
—— (2011) 在音變過程中產生又消失的軟顎化元音——雲南德欽燕門鄉穀扎藏語之例—— 《京都大学言語学研究》第 30 号（印刷中）
西田龍雄 (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108–169 冬樹社
Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol. 3, 15–34, National Museum of Ethnology
—— (2011) Development of prepalatal and palatal articulations in Khams Tibetan spoken in bDechen Shangri-La (Yunnan), paper presented at 17th HLS (Kobe)
朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館